

令和7年度 全国学力・学習状況調査の結果について

清川村教育委員会

1 調査の概要について

(1) 調査の目的

- ◇義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- ◇学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- ◇そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

【文部科学省 HP より引用】

(2) 調査実施日 令和7年4月17日(木)

(3) 調査の内容

- ◇小学校第6学年・中学校第3学年の全児童・生徒を対象
- ◇教科に関する調査は国語、算数・数学を出題
 - ①身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能 等
 - ②知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のために構想を立てて実践し評価・改善する力 等
- ◇生活習慣や学習習慣に関する質問紙調査を実施

(4) 調査に参加した児童・生徒数

	国語	算数・数学	理科	児童・生徒質問紙
小学校	16人	16人	16人	16人
中学校	12人	12人	12人	12人

(5) 全国・県・村の公立学校の参加状況

	小学校	中学校
全国(公立)	18,470校	9,584校
神奈川県	848校	419校
清川村	1校	2校

2 各教科の平均正答率

令和7年度 各教科平均正答率（単位は%）、平均IRTスコア一覧

	教 科	清川村	神奈川県	全 国	IRTスコア
小学校	国 語	70	66	66.8	
	算 数	59	59	58.0	
	理 科	56	57	57.1	
中学校	国 語	66	55	54.3	
	数 学	63	51	48.3	
	理 科	543	510	503	

※ 県・村の正答率は整数表示
 ※ 「IRT」とは、正答・誤答が、問題の特性（難易度、測定精度）によるのか、児童・生徒の学力によるのかを区別して分析し、児童・生徒の学力スコアを推定する統計理論のこと
 ※ 「IRTスコア」とは、IRTに基づいて500を基準にした得点で表すもの

3 令和7年度 全国学力・学習状況調査 調査結果概要

小学校 ※「学習指導要領の内容・領域」と「評価の観点」については、一つの問題が複数の区分に該当する場合があるため、それぞれの分類について各区分の問題数を合計した数は、実際の問題数とは一致しない場合がある。

【国 語】

※青数字は+5ポイント以上 赤数字は-5ポイント以上の差

分 類	区 分	対象 問題数	平均正答率(%)		比 較	
			清川村	県（公立）	全国（公立）	県（公立）
	全 体	14	70	66	66.8	4.0
学習指導要領の内容	(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項	2	65.6	73.3	76.9	-7.7
		1	56.3	63.7	63.1	-7.4
		1	93.8	81.3	81.2	12.5
	思考力、判断力、表現力等	A 話すこと・聞くこと	66.7	66.5	66.3	0.2
		B 書くこと	81.3	69.9	69.5	11.4
		C 読むこと	64.1	57.5	57.5	6.6
評価の観点	知識・技能	4	70.3	72.9	74.5	-2.6
	思考・判断・表現	10	70.0	63.9	63.8	6.1
	主体的に学習に取り組む態度	0	—	—	—	—
問題形式	選択式	9	70.1	65.5	64.7	4.6
	短答式	3	72.9	75.9	78.5	-3.0
	記述式	2	65.6	56.8	58.8	8.8

【算 数】

分 類	区 分	対象 問題数	平均正答率(%)		比 較	
			清川村	県（公立）	全国（公立）	県（公立）
	全 体	16	59	59	58.0	0.0
学習指導要領の領域	A 数と計算	8	64.8	63.5	62.3	1.3
		4	56.3	55.8	56.2	0.5
		2	50.0	55.1	54.8	-5.1
		3	52.1	59.9	57.5	-7.8
		5	62.5	63.2	62.6	-0.7
評価の観点	知識・技能	9	67.4	65.7	65.5	1.7
	思考・判断・表現	7	47.3	49.6	48.3	-2.3
	主体的に学習に取り組む態度	0	—	—	—	—
問題形式	選択式	6	63.5	68.7	67.2	-5.2
	短答式	6	67.7	64.2	64.0	3.5
	記述式	4	37.5	35.4	34.9	2.1

【理 科】

分 類	区 分	対象 問題数	平均正答率(%)		比 較	
			清川村	県（公立）	全国（公立）	県（公立）
	全 体	17	56	57	57.1	-1.0
学習指導要領の区分・領域	A区分	「エネルギー」を柱とする領域	42.2	46.6	46.7	-4.4
		「粒子」を柱とする領域	47.9	51.7	51.4	-3.8
	B区分	「生命」を柱とする領域	54.7	51.2	52.0	3.5
		「地球」を柱とする領域	65.6	66.6	66.7	-1.0
評価の観点	知識・技能	8	56.3	54.8	55.3	1.5
	思考・判断・表現	9	54.9	58.9	58.7	-4.0
	主体的に学習に取り組む態度	0	—	—	—	—
問題形式	選択式	11	55.1	55.4	54.7	-0.3
	短答式	4	67.2	68.1	69.7	-0.9
	記述式	2	34.4	43.5	45.2	-9.1

中学校 ※「学習指導要領の内容・領域」と「評価の観点」については、一つの問題が複数の区分に該当する場合があるため、それぞれの分類について各区分の問題数を合計した数は、実際の問題数とは一致しない場合がある。

【国 語】

※**青数字**は+5ポイント以上 **赤数字**は-5ポイント以上の差

分 類	区 分	対象 問題数	平均正答率(%)			比 較		
			清川村	県（公立）	全国（公立）	県（公立）	全国（公立）	
全 体		14	66	55	54.3	11.0	11.7	
学習指導要領の内容	知識及び技能	(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項	2	58.3	49.0	48.1	9.3	10.2
		(2) 情報の扱い方に関する事項	0	—	—	—	—	—
		(3) 我が国の言語文化に関する事項	0	—	—	—	—	—
	思考力、判断力、表現力等	A 話すこと・聞くこと	4	79.2	53.9	53.2	25.3	26.0
		B 書くこと	5	61.7	52.3	52.8	9.4	8.9
		C 読むこと	3	61.1	62.9	62.3	-1.8	-1.2
評価の観点	知識・技能		2	58.3	49.0	48.1	9.3	10.2
	思考・判断・表現		12	67.4	55.5	55.3	11.9	12.1
	主体的に学習に取り組む態度		0	—	—	—	—	—
問題形式	選択式		8	79.2	64.8	63.9	14.4	15.3
	短答式		2	79.2	71.8	73.6	7.4	5.6
	記述式		4	33.3	25.4	25.3	7.9	8.0

【数 学】

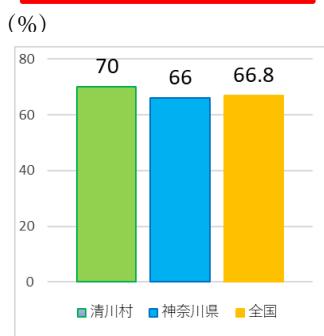
分 類	区 分	対象 問題数	平均正答率(%)			比 較	
			清川村	県（公立）	全国（公立）	県（公立）	全国（公立）
全 体		15	63	51	48.3	12.0	14.7
学習指導要領の領域	A 数と式	5	56.7	47.1	43.5	9.6	13.2
	B 図形	4	70.8	50.2	46.5	20.6	24.3
	C 関数	3	69.4	50.5	48.2	18.9	21.2
	D データの活用	3	58.3	58.1	58.6	0.2	-0.3
評価の観点	知識・技能	9	66.7	56.2	54.4	10.5	12.3
	思考・判断・表現	6	58.3	42.6	39.1	15.7	19.2
	主体的に学習に取り組む態度	0	—	—	—	—	—
問題形式	選択式	3	72.2	57.9	54.0	14.3	18.2
	短答式	7	63.1	53.5	52.0	9.6	11.1
	記述式	5	58.3	42.8	39.6	15.5	18.7

令和7年度全国学力学習状況調査の分析と今後に向けて

【小学校】

清川村教育委員会

国語の正答率



【強み】

«全国の平均正答率と比べて上回っているもの»

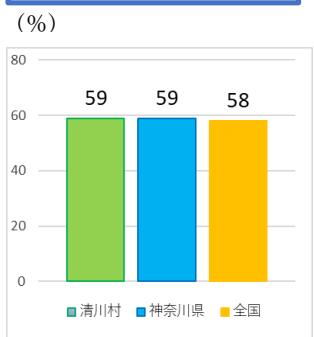
- 図表などを用いて自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができる。
- 自分が聞こうとする意図に応じて、話の内容を捉えることができる。
- 事実と感想、意見などとの関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を把握することができる。

【課題】

«全国の平均正答率と比べて課題と考えられるもの»

- 情報と情報との関係づけの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うこと。
- 学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使うこと。

算数の正答率



【強み】

«全国の平均正答率と比べて上回っているもの»

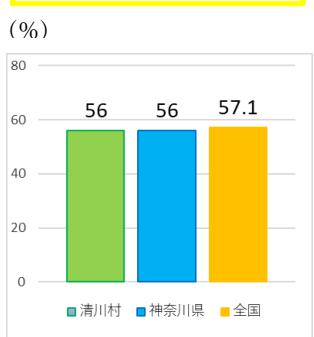
- 簡単な二次元の表から、条件に合った項目を選ぶことができる。
- 平行四辺形の性質を基に、コンパスを用いて平行四辺形を作図することができる。
- 数直線上で、1つの目盛りに着目し、分数を単位分数の幾つ分として捉えることができる。

【課題】

«全国の平均正答率と比べて課題と考えられるもの»

- 棒グラフから項目間の関係を読み取ること。
- 伴って変わる二つの数量の関係に着目し、必要な数量を見出すこと。

理科の正答率



【強み】

«全国の平均正答率と比べて上回っているもの»

- 結果や問題に対するまとめを基に、他の条件での結果を予想して表現することができる。
- 花のつくりや受粉についての知識が身についている。

【課題】

«全国の平均正答率と比べて課題と考えられるもの»

- 結果を基に結論を導いた理由を表現すること
- 顕微鏡を操作し、適切な像にするための技能を身につけること。

【今後の学習指導に当たって】

«国語»

目的や意図に沿って、線や囲みなどを図示することによって自分なりに情報を整理できるようにすることが重要。情報の整理の仕方については、年間を通じて複数回、意図的に指導することも大切。

«算数»

日常生活の問題を解決するために、ある一つの数量を調べようとするとき、その数量を直接調べにくい場合は関係のある他の数量に着目し、必要な数量を見出すことができるようになりますことが重要。

«理科»

結果を基に考察する際に、表やグラフなどに整理する活動を設けることで、結果を比較したり、複数の結果から多面的に考えたりして、自分の考えを表現できるように指導することが大切。

【児童質問紙調査の結果（全国と比べて肯定的な回答割合が高い〇 低い●）】

- 〇自分にはよいところがある。先生はあなたのよいところを認めてくれている。
- 〇将来の夢や目標を持っている。友人関係に満足している。
- 〇PC やタブレットなどの ICT 機器を使ってプレゼンテーション（発表のスライド）を作成することができる。
- 学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげるのこと。
- 毎日同じ時刻に寝ている・起きている。

【質問紙調査と教科の正答率の関連性についての分析結果（クロス集計）】

【正答率が上位となった子どもの特徴】

1 自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか。

	平均正答率 (%)		
	国語	算数	理科
肯定群平均	75.6	64.1	63.7
否定群平均	53.6	42.2	38.4

2 学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）一日当たり 1 時間以上タブレットなどの ICT 機器を、勉強のために使っている。

	平均正答率 (%)		
	国語	算数	理科
1 時間以上	75.0	68.7	58.9
1 時間未満	68.5	55.2	54.4

【今後に向けて】

《質問紙調査から》

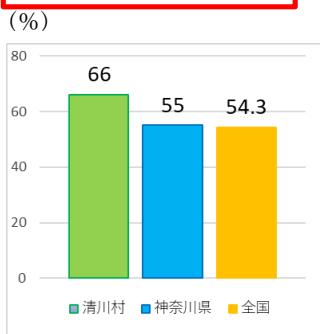
〇質問項目の「自分にはよいところがある」という回答が多いことから、本村の児童の自己肯定感は県や全国と比較して高い傾向にあることがわかります。また、昨年度に引き続き「先生はあなたのよいところを認めてくれている」という回答が県や全国と比較して多いことから、先生たちも一人ひとりのよいところを積極的に認めてくれていることがわかります。自分のよいところをほめてもらったり、がんばりを認めてもらったりすることが自己肯定感を高めることにつながっています。今後も自他のよいところを積極的に認め合える関係を大切にしていきましょう。

〇学校の授業時間以外に、一日当たり 1 時間以上タブレットなどの ICT 機器を、勉強のために使っている児童の各教科の平均正答率が高くなる傾向があります。学校での使用頻度も県や全国と比較して多い傾向にありますが、学校の授業の中で培ってきた力を更に発展させ、家庭学習等においてもタブレット端末をより効果的に使い、各教科の学習への理解度を向上させていきましょう。

〇県や全国と比較して、学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることに課題を感じている児童が多い傾向にあります。また、クロス集計で示されているとおり、自分と違う意見について考えるのが楽しいと感じている児童の各教科の平均正答率が高くなる傾向にあります。まず、自分自身でできたことを確認し、できなかつたことの原因を考え、改善点を次の学習に活かす体験を重ね、その上で、自分とは違う友達の考え方があることの面白さに気付き、それを自らの学びに還元していくような習慣づくりを行うことが大切です。

【中学校】

国語の正答率



【強み】

『全国の平均正答率と比べて上回っているもの』

○事象や行為を表す語彙について理解している。

○目的に応じて、集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にすることができます。

○自分の考えが明確になるように、論理の展開に注意して、話の構成を工夫することができる。

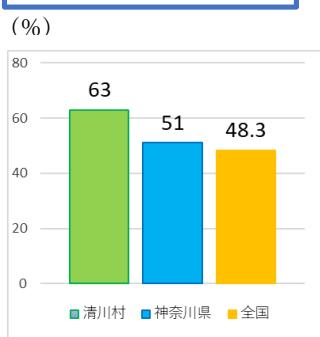
【課題】

『全国の平均正答率と比べて課題と考えられるもの』

●文脈に即して漢字を正しく使うこと。

●文書の構成や展開について、根拠を明確にして考えること。

数学の正答率



【強み】

『全国の平均正答率と比べて上回っているもの』

○事象に即して、グラフから必要な情報を読み取ることができる。

○多角形の外郭の意味を理解している。

○証明を振り返り、証明された事柄を基にして、新たに分かる辺や角についての関係を見出すことができる。

【課題】

『全国の平均正答率と比べて課題と考えられるもの』

●数量を、文字を用いた式で表すこと。

●早大度数の意味を理解すること。

理科の正答率



【強み】

『全国の平均正答率と比べて上回っているもの』

○回路の電流・電圧と抵抗や熱量に関する知識や技能が身についている。

○探究から生じた新たな疑問や身近な生活との関連などに着目した振り返りを表現できる。

○化学変化に関する知識や技能を活用して、実験の結果を分析して解釈し、化学変化を原子や分子のモデルで表すことができる。

【課題】

『全国の平均正答率と比べて課題と考えられるもの』

●地層に関する知識や技能と関連付けて、地層を構成する粒の大きさとすき間の大きさに着目して分析すること。

●水の中で呼吸を行う生物について、生命を維持する働きに関する知識を概念として身に付けること。

【今後の学習指導に当たって】

『国語』

作品の場面を捉えてその構成を理解するだけでなく、登場人物の心情の変化に沿って文章の流れを捉え、その展開を把握することが求められる。その際、なぜそのような構成や展開になっているか、そのことがどのような効果につながるのかなど、自分なりに意味づけをすることが重要。

『数学』

具体的な数や言葉を使った式などを利用して数量を捉えたり、表した数量が正しいかどうかを事象と関連付けて吟味したりする活動を取り入れることが大切。

『理科』

小学校で学習した知識と関連付けて考えること。また、粒の大きさの異なる地層モデルを用いた実験を通して見出したことと、実際の地層とを関係づけて解釈することが重要。

※ 【今後の学習指導に当たって】は、国立教育政策研究所が作成した報告書より抜粋

【生徒質問紙調査の結果（全国と比べて肯定的な回答割合が高い○ 低い●）】

- 自分にはよいところがある。先生はあなたのよいところを認めてくれている。
- 分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学びを考え、工夫することができる。
- 学級の生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方方に気付いたりすることができる。
- 毎日同じくらいの時刻に起きている。

【質問紙調査と教科の正答率の関連性についての分析結果（クロス集計）】

【正答率が上位となった子どもの特徴】

- 1 自分は PC・タブレットなどの ICT 機器を使って情報を整理する（図、表、グラフ、思考ツールなどを使ってまとめる）ことができると思いますか。

	平均正答率 (%)			平均 IRT スコア
	国語	数学	理科	
肯定群平均	68.6	66.0	543	
否定群平均	53.6	50.0	541	

- 2 1、2 年生の時に受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか。

	平均正答率 (%)			平均 IRT スコア
	国語	数学	理科	
肯定群平均	67.8	66.7	549	
否定群平均	57.1	46.7	514	

【今後に向けて】

『質問紙調査から』

○クロス集計から、自分は PC・タブレットなどの ICT 機器を使って情報を整理する（図、表、グラフ、思考ツールなどを使ってまとめる）ことができると思っている生徒ほど、各教科の平均正答率が県や全国と比較して高い傾向が伺えます。日々の授業の中で効果的に活用することにより、情報収集の力が育成され、その力が各教科への理解度を高めることにつながっています。今後も、より効果的に活用できるような機会を積極的に捉え活用の幅を広げていきましょう。

○「分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学びを考え、工夫することができる」や「学級の生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方方に気付いたりすることができる」の項目に対する肯定的な回答が多いことからも、生徒が安心して学習に取り組む環境ができていることがわかります。こういった環境は生徒の学習意欲や成長の土台ともいえる重要な条件ですので、大切にしていきましょう。

○クロス集計から、1、2 年生の時に受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していた生徒ほど、各教科の正答率が高い傾向がうかがえます。現在行っている探究活動の時間などを活用し、生徒が主体的に考え、自分の考えを表現する機会がとても重要になります。今後も聞き手を意識した発表を通して、自己表現の力に更に磨きをかけていきましょう。